石造りの純和式灯台

ほぼ原形で残る

対馬・厳原町の吉田さん　自宅の庭に保存

明治から大正にかけ、対馬・厳原町の厳原港口、野良崎で韓国との貿易船や本土との連絡船などの進しるべとして多くの船の安全を見守った純和式の灯台が、ほぼ原形のまま厳原町内の民家の庭に残され、お年寄り夫妻の手で守られている。

ほぼ原形のままの純和式の灯台と吉田さん夫妻（対馬・厳原町天道茂の自宅で）

元町助役で町議会議長も務めた町内天道茂の吉田善助さん（七三）が、戦後間もなく、野良崎付近でこの灯台が取り壊されているところに出合い、譲り受け自宅の庭に運んできた。高さ約三・五㍍の石造りで、燈籠（とうろう）のおばけのような形をしている。光源は灯油で、燈籠と同じく灯がともる部分に天井から灯油の入ったさらのようなものをぶらさげ、それを燃やしていたらしい。天井にはその跡と思われる穴があいている。

また、灯台の裏側にある刻文から、明治九年に島内の問屋五軒が、厳原港に出入りする船の道案内に建てたもの、と推測されている。

厳原海上保安部灯台課の資料では、野良崎灯台については、大正十三年六月一日に初点灯、厳原町が設置、維持管理をしていた、との記録がある。灯台の歴史を研究している同保安部の島本久灯台課長は、吉田さん宅に残っている灯台は明治九年から公設の灯台ができる大正三年まで活躍した、とみている。

島本課長の話では、日本には明治八年までに、すでに洋式の灯台が二十八基も設けられており、そういう意味では吉田さん宅の灯台は珍しくないが、純和式の灯台は戦後間もなく改良、改修工事でほとんどが壊されて建て替えられたため残っておらず、数少ないという。そして「問屋さんという民間人が建てた灯台というのは誇わめて珍しいのでは」といっている。

吉田さんにとって、幼いころよく遊んだ思い出深い灯台だったため、壊され捨てられるところだったのを譲り受けたが、当時は奥さんの操さん（六七）も「こんなものを。物好きな」と庭に置くことに反対だったという。最近はあちこちから「灯台を見せて」と訪れる人が多く、吉田さん夫妻は「やっぱり残しておいて良かったんだな」と灯台を見上げては感慨深い何日を送っている。